
真・恋姫†無双 零崎綽識の人間関連

無音 無心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 零崎繰識の人間関連

【コード】

N3067L

【作者名】

無音 無心

【あらすじ】

「零崎一賊（ぜいさきいちぞく）」
それは“殺し名”の第三位に列せられる殺人鬼の一族。

“殺戮衝動”ことデスサイスを操る、零崎繰識（ぜいさきくわし）。
突如として現れた橙なる種 想影真心によって殺された彼は異なる世界へと転生する。
果たして
そこで彼を待つ物とは……？

登場人物紹介

曹操（そうそう）

魏の王。

夏侯惇（かこうとん）

武将。

夏侯淵（かこうえん）

武将。

荀彧（じゅんいく）

軍師。

許緒（きよちよ）

武将。

典韋（てんい）

武将。

程立（ていいく）

軍師。

郭嘉（かくか）

軍師。

楽進（がくしん）

武将。

李典（りてん）

武将。

于禁（うきん）

武将。

劉備（りゅうび）

蜀の王。

関羽（かんう）

武将。

張飛（ちょうひ）

武将。

諸葛亮（しゅかつりょう）

軍師。

鳳統（ほうとう）

軍師。

趙雲（ちよううん）

武將。

馬超（ばちょう）

武將。

馬岱（ばたい）

武將。

黄忠（こうちゆう）

武將。

璃々（りり）

幼女。

嚴顔（げんがん）

武將。

魏延（ぎえん）

武將。

孫策（そんさく）

呉の王。

孫権（そんけん）

呉の姫。

孫尚香（そんしょうこう）

呉の姫。

黄蓋（こうがい）

武將。

周瑜（しゅうゆ）

軍師。

陸遜（りくそん）

軍師。

甘寧（かんねい）

武将。

呂蒙（りよもう）

軍師。

周泰（しゅうたい）

武将。

董卓（とうたく）

少女。

賈馮（かく）

軍師。

呂布（りよぶ）

武将。

陳宮（ちんきゆう）

軍師。

張遼（ちようりよう）

武将。

華雄（かゆう）

武将。

袁紹（えんしょう）

袁家の子孫。

文醜（ぶんしゆう）

武将。

顔良（がんりよう）

武将。

袁術（えんじゆつ）

袁家の子孫。

張勳（ちようくん）

武将。

張角（ちようかく）

歌手。

張宝（ちようほう）

歌手。

張梁（ちようりょう）

歌手。

公孫賛（こうそんさん）

幽州太守。

貂蝉（ちようせん）

?????。

華佗（かだ）

医師。

卑弥呼（ひみこ）

?????。

馬騰（ばとう）

涼州盟主。

零崎線識（ぜろざき・くるしき）

殺人鬼。

零崎零識（ぜろざき・ぜろしき）

殺人鬼。

零崎機織（ぜろざき・はたおり）

殺人鬼。

零崎人識（ぜろざき・ひとしき）

殺人鬼。

匂宮出夢（におうのみや・いずむ）

殺し屋。

本郷一刀（ほんごう・かずと）

天の御遣い。

石丸小唄（いしまる・こうた）

大泥棒。

想影真心（おもかげ・まごころ）

橙なる種。

哀川潤（あいかわ・じゅん）

赤き制裁。

西東天（さいとう・たかし）

最悪。

石風刀夜（いしなぎ・とうや）

死神。

戯言遣い。

第一幕……曹操との関連

楚の国に祭祀を司る者がいた。

その召使たちに大きな酒壺に入った酒を与えた。

彼らは話し合つて言った、「数人でこれを飲めば足りないが、一人で飲めば余るほどだ。どうだろう、地面に蛇の絵を描いて、最初に描き終えた者が酒を飲むことにしよう」と。

一人の男がまず出来上がった。

彼は酒を引き寄せて今にもこれを飲もうとした。

そこで、左手に酒杯を持ち、右手で蛇を描きながら、「おれは蛇の足まで描けるぞ」と言った。

その男が描きあげないうちにもう一人の蛇ができあがった。

その男は酒壺を奪い取り、「蛇にはもともと足がない。どうして足が描けるのか」と言つて、そのまま酒を飲んでしまった。

蛇の足を描いた男は、結局酒を飲み損ねてしまった。

(蛇足／戦国策・斉策)

第一章……「(非)」「(前書き)」

「さあ 零崎を始めよう」

第一章……「（非）」

俺は、彼らに拾われて育てられた。

『零崎一賊』。

彼らは、そう呼ばれる一賊の人間だった。それは理由を持たずに人を殺す『殺人鬼』の集団。

しかし……どうしてだろうか、彼らは俺を殺さなかった。

そして、俺は『殺人鬼』になった。

だからといって、別に彼らを恨んではいない。

『零崎一賊』であるという理由だけで殺されそうになったとしても、それは変わらない。

目の前に橙色の悪魔が迫っつていようとも。

俺の彼らに対する感謝は揺るがない。

零崎零識と零崎機織に対する感謝は　。

「……………」

橙色のそいつは何も言わない。

そして、表情を変えることなく俺を殺した。

「ざあくんねんでした。天国に行きそびれたねえ」

白髪で眼鏡を掛けたそいつは、嬉しそうに言った。

「……………誰だ？」

「僕？　僕は神様だよ」

「神様……………だと!？」

本当は、そんな物の存在自体信じたくはないが、まあいい。話だけでも聞いてみるか。

「……………それで、その神様が俺に何のようだ。俺は確かに死んだはずだが……………」

「うん。確かに君は死んだんだよ。けど……………あゝもう、面倒臭いなあ。説明してくれる助手とかがいればいいんだけどな。まあ……………いいや。それでね、君は偶然にも転生者に選ばれたんだよ」

「転……………生……………者？」

何だそれ？

「つまり生き返れるってこと。ただし、君が今までいた世界とは別の世界に行くことになるんだけどね」

「それは……………願ってもないことだな」

たとえ別の世界でも、生き返れるのなら……………それに越したことはない。

「じゃあ、転生するってことでいいのかな……」

「ああ」

「うん……そうだね、転生者はその特典として、願い事を一つ叶えられるんだけど、どうする？」

「願い事か………そうだな……。」

「錬金術が使えるようになるっていうのはいいのか？」

「錬金術………ねえ。まあ………いってことにしておこうかな」

「それはありがたいな。で、俺はどんな世界に行くんだ？」

「さあ？」

「は？　なんでお前が分からないんだ？」

「ランダムだからね。んじゃ、そろそろ時間だから………いってらっしゃい」

神様？　　がそう言うと、俺は白い光に包まれて、気を失った。

気が付くと、目の前には荒野が広がっていた。

「はあ？」

俺は、一体何処に飛ばされたんだ？

そう思つて、俺は辺りを見渡す。しかし、目の前に広がるのは、ただっ広い荒野のみ……………いや、違う。

俺の目に写ったのは、四人の男だった。黄色い異様な格好をした中年男が三人に、白い学生服のような格好の少年。

「どういう状況だ…………？」

一人の中年男が少年にナイフを突き付ける。

「

少年が何かを言っているが、俺はそれが何かは分からない。

それから、少年が中年男たちに何かを手渡した。

「

「

少年と中年男たちは何かを話し、それから一番小さい中年男が少年を蹴り上げた。

少年は吹き飛ばされ、ごろごろと砂の上を転がる。

「

「
」
彼らは何かを喋り続け、その間に俺は彼らに近づいていく。俺は彼らの会話を聞き取れる位置まで移動し、中年男たちが刀を構えた……その時。

「待てい！」

おそらく女性の物であろう、怒声がその場に響き渡った。

「っ！」

「だ、誰だっ！」

中年男たちが、うるたえて叫ぶ。

「たった一人の庶人相手に、三人掛かりで襲い掛かるなどと……その所行、言語道断！」

そんな外道の貴様らに名乗る名前など、ない！」

そう言っつて現れた、これまた異様な格好をした水色のショートカットの少女は、右手の赤い槍（あれって、ロンギヌスの槍か……？）で中年男たちを薙ぎ払った。

「なんだなんだ。所詮は弱者をいたぶることしか出来ん三下か？」

少女は雄弁に語る。

「くっ……おい、お前ら！ 逃げるぞっ！」

中年男たちが逃げ出す。

「逃がすものか！」

それを、少女が追いかける。

「あ……ちょっと待っ……」

さらに、それを俺が追いかける。

「くそっ！」

中年男たちが馬に乗って、逃げ出した。

少女は、それを見て諦めたらしく、来た道を引き返していった。

「うーん……あいつらを追いかけるか……」

そう言ってから、俺は中年男たちの後を追いかけていく。

……相手は馬だけど、足跡を辿ればいいか。

足跡を辿りながら、歩き続けると目の前に巨大な建造物が立ち塞がった。

それは 城のような物。……とは言っても、日本の城とは似て異なる物。どちらかというところ、中国……の物のように思える。

「どうするか……」

俺は、とりあえず城の門を叩いてみた。すると……。

ぎい、と。門が開いて、中からさっきの中年男の一人、一番小さい奴が出て来た。

「あ、何だ？ てめえ……？ おかしな格好だな。売れば、相
当の金になんじゃねえか？」

ちなみに、今の俺の格好は赤いシャツに黒のジーンズ。その上から
真っ黒の長いコートを着ている。

「金に……なるのか？ まあ、そんなことはどうでもいいんだ。
なあ、俺を用心棒にでもしてくれねえか？ 何、金は要らねえ。
俺は異国から来たから、このことが全く分からない。だから、そ
れを教えてくれればいい。あとは、刀を五、六本くれれば皆殺しに
してやるよ」

「……ああ？ 何言ってるんだ？ てめえ」

「聞こえなかったか？ 用心棒にしろって、言ったんだけど」

「何を偉そうに!!」

そいつは、刀を取り出した。

「はあ……俺は用心棒にしろって……」

「ふざけんじゃねえ!!」

そいつは刀を振りかざした。

……仕方ねえな。

「何っ……!!」

次の瞬間、そいつの手にあった刀は俺の手に握られていた。

「て、てめえ……一体何しやがった!？」

「何もしてねえよ。ただお前が弱いだけだ。……で、用心棒の話だが、どうする?」

「……アニキに聞いてみるぜ」

「よろしく、三下」

……かくして、そのアニキとやらが了承したらしく、俺はそいつらの用心棒ということになった。

とりあえず聞いた話をまとめてみる。

ここはおそらく西暦二百年ごろの中国。いわば、三国志の時代らしい……と、分かったのは、これだけ。いや、あの中年男たちが盗賊だったつても、分かったか。

「さてと、これからどうするか……」

このまま、ここに続けると、多分賊退治なんかの標的になるよな。

かといって、行く宛なんて無いしな。

「困ったな」

そう言いながら、俺は用意された部屋の床にナイフを使って、錬成陣を描いていく。

「……………つと、これでいいか」

その錬成陣の中央に、貰った刀六本を置き、錬成陣に手を付く。

「錬成……………」

赤い光が走り、六本の刀があった場所には二振りの黒い鎖鎌が存在していた。

「……………これは、便利だな」

そう言うってから、俺は鎖鎌をコートの中に仕舞った。

「……………暇だな。城ん中でも見て回っておくか」

俺は、城の中を見て回ることにして、部屋を出る。まるで城とは思えないような、殺風景な石の廊下を歩いていく。少しして、俺は木で出来た柵のような物を見つけた。

その向こうには、俺と同じ年くらいの少女や、小さな子供たちがいた。

「お前ら、こんな所で何してるんだ？」

「私たちは近くの村に住んでいたのですが、盗賊たちに襲われて、

ここに連れて来られたのです」

それを聞いた瞬間、俺は異常な目眩に襲われた。

……マジかよ、と呟いてから、俺は鎖鎌を振るい、柵を切り裂いた。

「……逃げろよ。この道をまっすぐ行けば、外に出られるから」

俺は来た道を指して言う。

「で、でも……途中で盗賊に見つかったら……」

「大丈夫だ。見つからない」

「え……」

「絶対に見つからないから、俺が行ってから少ししたら、逃げろよ。じゃあな」

そう言い残して、俺は来た道を戻る。

その途中で会った盗賊たちに、宴会の時に使われていた広場のような場所に来るように言い、俺自身も広場に向かった。

「おい！ 一体何の用だ？」

俺を囲むようにして、広場に集まった約2000人の盗賊たちが言う。

「……………」

俺はその問いに対して、答えるかわりにコートの中から鎖鎌を取り

出す。

「な、何をするつもり……………ひいっ!!」

何かを言いかけた盗賊の右手首から先が飛んだ。

「てめえ!!」

盗賊たちが刀を構える。

「……………」

俺は黙り込んだ後、小さく笑って それを告げた。

「零崎開始」

殺したくないけど、殺したい。

なら、どうすればいい。

簡単だ。殺せばいい。

……………今までと同じだ。衝動に任せればいい。どうせ失う物なんて、何も無い。

「……………」

俺は只、無言で鎖鎌を振るつ。

只々、殺戮を繰り返す。

自分以外の全てを殺すまで、止まらない。

イカれたように、壊れたように、狂ったように　。赤い血液に塗れながら。

けれど……どうしてだろうか。周りが赤に染まっていく光景が、なんだか心地良く思えた。

気がつくと、辺り一面が静かになっていた。

さっきまでの叫び声すら、一つも無く……只々、静まり返っていた。

俺は無意識に、鎖鎌に付着した血液を拭うように舐める。

その時、金属を叩き合わせたような音が響いた。

そして、その後続くのは門が開く音　。

「何だ……！？　これ……」

声が出た方を見ると、そこには先ほどの少年と、暗い紫と青を基調とした格好で、金色の髪を巻いた少女……その他、鎧のような物を纏った男たちがいた。

「何があったというの！？」　　答えなさい……！」

金髪の少女が叫ぶ。

それに対して、俺は一言。

「　俺が殺した」

それを言い終えた……その途端、異常な頭痛が俺を襲った。

「く……そ……」

俺はその頭痛に耐え切れずに、倒れ込む。

それと同時に、金髪の少女の横で少年が倒れ込むのが見えた。

（関連継続）

第一章……「(非)」「(後書き)」

この作品は、とかく個人的な感情によって書かれた物です。

いわば、「Airs」の代わりということになります。

不定期な更新になりますが、どうぞよろしくお願いします。

第二章……「(非)」

気付くと、目の前には見知らぬ天井が広がっていた。

「……………」

俺は覚醒し切らない頭をフル稼働させて考える。

確か……想影真心に殺されて、神様だとか言う奴に会って、転生して、気付いたら、荒野にいて、盗賊の用心棒になって……………そう
だ。

また　　殺しつちまったんだ。

「くそっ……………!!」

手が血に塗れるような感覚に襲われて、俺は吐き出すように言う。その時。

「あら？　　ようやく気が付いたのね」

突然、女性の声がした。

「誰だ!？」

俺は声のした方を見て叫ぶ。

そこにいたのは　　長い黒髪の女性に、青い短髪の女性、そして　　以前にも見た金色の髪を螺旋のように巻いた少女。

「誰だ、とはご挨拶ね。あなたをここまで運ばせたのは私なのだけ
れど」

「それは感謝する。その上で訊くが、ここは何処で、お前は誰だ？」

俺が言った途端、黒髪の女性の表情が変わった。

「貴様あ！！　華琳様に対して何と無礼な！　今すぐそこに直
れ！　叩き斬ってやる！！！」

「なっ！？」

「死ねえ！！！」

ザン、っと大太刀が振るわれるのが見えた。

「危ねえ！」

俺は、ぎりぎりの所でそれを避けて、金髪の少女に向かって言う。

「あの、華琳さん……だっけ？　あれ、止めてほしいんだけど」

「「「！！！！！！！！」」」

え？

「き、き……貴様ああ……!! 華琳様の真名を軽々と呼ぶなどと……!!」

黒髪の女性が大太刀を振りかぶる。今までの数倍は速い。

やばいな、避けれそうにない。

「……………仕方ないか」

「死ねええええええ!!!!!!」

高速で振り下ろされる大太刀 俺は右手を出して、それを受け止めた。

「……………なっ!?!」

「俺が悪いんだろうとは分かるんだけど、何が悪いかわからない。てか、真名って何だ?」

「くっ、このまま叩き斬ってやる!!」

無視ですか……………はい。分かった。

「くううううう」

やばっ、力負けする……………!!

そう 俺が少しばかり死を覚悟した時、

「春蘭!!」

怒声が響き渡った。

「か……華琳様」

黒髪の女性が動揺したように言い、刀に込められた力が弱くなる。

「剣を納めなさい」

「ですが、華琳様……」

「納めなさいと言ったの」

「……はい」

すっ、と刀が引かれた。

「……助かった」

俺が言うと、華琳と呼ばれた金髪の少女は笑みを浮かべて言った。

「助けてあげたのだから、私の質問に答えなさい」

「まあ、それくらいならいいけど」

「なら良いわ。まず最初に、あなたの生まれた国は？」

「日本……だけど。いや、この時代だと倭か」

「やはりそういうことね……。春蘭、一刀を呼んで来なさい。今す

ぐっ」

「はいっ！」

気持ちの良い返事をして、黒髪の女性は去って行った。

……………。

長い沈黙。

「……………」

正直、気まずい。

「連れて参りました！！ 華琳様！！」

沈黙が破られた。

黒髪の女性に連れられてきたのは、前に盗賊に襲われそうになっていた学校の制服らしい物を着た少年。

今思うと、この少年も俺と同じなのかもしれない。

「華琳。何だよ、用って」

「一刀、あなたはこんな服装に見覚えがあるかしら？」

金髪の少女は俺を指差して言う。

「俺のいた世界なら、普通だな」

「……………決まりね」

金髪の少女は静かに笑った。

「あなた、行く所はあるの？」

「いや、用心棒にしてもらった盗賊は殺してしまったから、今は無い」

「なら、私の所に来るといいわ」

「華琳様！」

「春蘭は少し黙っていなさい」

「むう」

黒髪の女性が小さく見える。

まあ、それは置いとくとして。この少女の所に行くことに何か利点があるのだろうか。てか、この少女は誰なんだ？

「なあ、名前を訊きたいんだけど」

「普通、名を聞くときは自分から名乗るのが礼儀ではなくて」

「あ……………」

ミスった。

「まあいいわ。私は曹孟徳よ」

.....。

「は？」

「だから、私は曹孟徳よ」

「いやいや、曹操って言ったら三国志の.....」

いや、ここはそういう世界なのか。

「あなたも操の名を知っているのね」

「え.....いや、それは」

「まあ、そんなことはいいのだけけど。それで、私の名を知って、私の所に来る気になった？」

「.....そうだな。衣食住だけは確保してくるんだろうな？」

「それは、あなたの働き次第よ」

「オーケイ。それなら、十分だ」

「おおけい？」

「分かった、って意味だ」

「へえ。そうね。あなた、名は何と言っの？」

「零崎線識」

「真名は？」

「無い……いや、真名が親しい間柄で使う名前だとするなら、統夜とじやだ」

「あら、真名があるの。一刀、あなた、真名は本当に無いのよね？」

「ああ。多分、それはファミリーネームだ」

「ふぁみりいねえむ？」

「真名みたいな物だよ。まあ、そういう風習がある所と無いところがあるけど」

「なるほどね。私の真名は華琳よ」

それって……………。

「読んだら、殺されるんじゃない……？」

「当たり前だ!!」

怒声。

「春蘭」

金髪の少女　華琳の一言で黒髪の女性が大人しくなる。

「助かったよ。華琳」

「貴様あ！」

「……………春蘭。いい加減になさい」

「ですが……………華琳様あ」

「なら、統夜と一騎打ちでもしてみたらどうかしら」

……………は？

「なるほど！ さすが華琳様です！ さあ行くぞ、零崎！！」

ずるずると俺を引きずっていく黒髪の女性。

いい加減これ面倒だな。

「なあ、あんたの名前は？」

「夏侯元讓だ！」

ああ、なるほど。夏侯惇か。

というわけで、俺は黒髪の女性……………改め、夏侯惇に引きずられていった。

強い日差しが照り付ける。

がちやり、と鈍い音を立てて、夏侯惇は大太刀を構えた。

「てかさ、俺武器無いんだけど」

鎖鎌は盗賊の城に置きっぱなしになっているだろうし……いや、もしかしたら壊れてしまってるかもしれない。

「何。いるのか？」

……素手で戦えとでも？

「刀を二本ほど、貰いたいんだけど」

華琳の方を見て、俺は言う。

「そうね。春蘭に勝てるならいいわ」

は？

「一刀、武器庫から刀を二本持って来なさい」

「ああ、テキトーなのだな」

そう言って制服の少年（これも面倒だな）は走っていった。

さてと、どうやって鎖鎌を作るか。

錬金術を見せるってのはまずいしな。

………一か八か、あれをやってみるかな。

てか、勝てなかったらどうなるんだ？

「お〜い、持って来たぞ」

制服の少年が持って来た二本の刀。

……なるほど。

流石は曹操、と言った所か。業物というわけではないが、悪くもない。盗賊達とは大違いだ。

「じゃあ、始めるか」

刀を受け取って、俺は言った。

「おうっ、待ちくたびれたぞ」

夏侯惇も大太刀を構える。

「よーい………」

どんっ！　、と叫んで俺は後ろへ飛んだ。

「なっ！？」

いや、違う。実際は上に飛んだんだ。

太陽を背にしているから、俺の姿は誰にも見えない。今なら、錬金術を使っても分からない。

赤い光を放ち、二本の刀は漆黒の鎖鎌へと変わった。（ノーモーション錬成成功だな）

「よっ、と」

着地すると同時に俺は鎖鎌を高速で振り回して、螺旋を描く。風を切る音が響くのが心地よい。

「なんだ？　それは？　どこから出した？　二本の刀は？」

「まあ、気にするな。てか、気い抜くなよ。負けるぞ」

俺は地面を蹴り、跳躍する。

「誰が！！」

夏侯惇も大太刀を構えて、突撃してきた。

「はあ！！」

夏侯惇の刃が迫ってくる。

けれど、たとえ名将夏侯惇が相手と言えども、俺にとってはこんな勝負は元から意味が無かったのだ。

「……………」

俺は無言で、鎖鎌を持つ力を抜いた。

がぎいん、と鈍い音が響いた。

「零崎繰識。あれは、零崎人識が血統書付きの殺人鬼だとするなら、血統書無しの殺人鬼」

「そのまんまじゃないのか」

「そのように聞こえるが、あれは元来殺人鬼であるはずがない。しかし、あれ以上に殺人鬼の名が相応しい者はいない」

「意味が分からないぞ」

「簡単にいえば、あれは殺人鬼としては例外であり、その上最強だということだ」

「でも、俺様に負けたんだろ」

「『でも、俺様に負けたんだろ』。ふん。そうだな」

狐の面をした男は心底愉しそうに言った。

(関連継続)

第二章……「(非)」「(後書き)」

一刀を呉か蜀に行かせようかなとか思います。

今回は遅かったのですが、次は早く更新しますので！

では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3067/>

真・恋姫†無双 零崎隼識の人間関連

2010年11月14日10時20分発行